# 主体的な学習態度を育む小学校国語科ノートづくりの研究（3）
## －複式学級の間接指導における国語科ノートづくりの効果－

原田義則*

（2023 年 11 月 15 日　受理）

Elementary School National Language Study Notebook Instruction that Fosters Proactive Learning (3): The Effect of Japanese Language Note-Making in the Indirect Instruction of Multi-Grade Classrooms

HARADA　Yoshinori・

**要約**

「令和５年度学校基本調査」（文部科学省　令和５年５月１日現在）によると，全学級数に対して複式学級数の割合が全国平均の２倍にあたる約４％以上を占める都道府県は，北海道・岩手・和歌山・島根・山口・愛媛・高知・長崎・宮崎・鹿児島の１０道県である。中でも鹿児島は最も多い９．９％という状況である。逆に複式学級を有しない都道府県は皆無である。すなわち小学校教員は全国のどこにあっても，複式学級における授業を展開することが求められる。

一方，昨今の教育改革のキーワードは，未来を創り出せる資質・能力育成に向けた「主体的・対話的で深い学びの実現」「個別最適な学びと協働的な学びの一体化」「エージェンシー」「自己調整・共調整」である。これは複式学級でも実現が求められ，ガイド学習を例とする「自分たちで国語科授業を進める」から，「自分たちで国語科授業をつくる」ことへの転換と捉えられる。これは，複式学級における課題とされてきた「間接指導の充実」についても解決の糸口を提供する。また，「自分たちで国語科授業をつくる」ことは，「単式学級」における国語科指導にも強力に応用されていく。

そこで本研究では，原田（2021・2022）の成果を踏まえ，複式学級における国語科ノート指導について研究を行った。具体的には，児童が国語科ノートを自ら「つくる」ことが国語科授業を「つくる」という視点から，鹿児島県奄美市立崎原小学校３・４年担任と共同研究を進め，児童の変容を分析した。なお，本研究は令和５年４月１日から始め，脱稿時点における途中経過報告である。

**キーワード**：ノート指導，複式指導，思考ツール，共有，時間管理，ＡＡＲサイクルの循環

*　鹿児島大学法文教育学域教育学系准教授

## １　研究の背景と目的

「令和５年度学校基本調査」（文部科学省　令和５年５月１日現在）によると，全国の小学校 273,983 学級に対して，複式学級は 4,417 学級ある。ちなみに単式学級は 214,942 学級，特別支援学級 54,624 という状況である。最近５年間の推移では，約 4500 学級前後を推移しており，これは全体学級数の約２％にあたる。また，全学級数に対して複式学級数の割合が，全国平均の２倍にあたる約４％以上を占める都道府県は，北海道・岩手・和歌山・島根・山口・愛媛・高知・長崎・宮崎・鹿児島の１０道県あり，中でも高知県は７．８％，鹿児島は最も多い９．９％という状況である。

逆に複式学級を有しない都道府県は皆無である。（東京１０学級，神奈川７学級）。すなわち小学校教員は全国のどこにあっても，複式学級における授業を展開することが求められる。

一方で，義務教育の機会均等や水準の維持・向上の観点から，文部科学省から自治体ごとに学級規模の適正化について検討を進め，複式学級解消に通達されていることも確かである。少子化が更に進むことが予想される中，今後，学校の統廃合により，複式学級が解消される地域も見られることになろう。

しかし，文部科学省が「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引 ～少子化に対応した活力ある学校づくりに向けて～」(平成２７年１月２７日)の中で指摘したように，「市町村の中には，様々な事情から学校統合によって適正規模化を進めることが困難であると考える地域や，小規模校のまま存続させることが必要であると考える地域も存在する」とし，その場合は児童生徒への教育を充実させるために，小規模であることのメリットを最大限に生かした方策や工夫」が求められるとしている。そして，教育の充実が図られる工夫が施された場合には，小規模校の存続も有り得るとする。鹿児島県の離島状況を考えた時，海を越えての統廃合が進むとことは考えにくい。

鹿児島県では伝統的に複式学級のよさを生かした国語科授業法について多くの実績を積み上げてきた。例えば，「わたりとずらし」「ガイド学習」「ペア学習」「合同・集合・交流学習」などは，本県の複式学級担任として身に付けておくべき基本的指導法として繰り返し研修会で取り上げられる。教室内の教師の立ち位置，主体性の発揮を意識した役割分担，学校学年枠を超えた学習形態の編成に至るまで，細かな配慮を伴う研究実践が積み上げられてきた。その成果は，全国の複式学級担任も参考になるものと推測できる。

しかし，昨今の激動する教育改革の波は，本県の複式学級指導研究に更なる改善を求める。未来を創り出せる資質・能力育成に向けた「主体的・対話的で深い学びの実現」「個別最適な学びと協働的な学びの一体化」では，「エージェンシー」「自己調整・共調整」という言葉が注目されている。誤解をおそれずに述べると，これは「自分たちで国語科授業を進める」から「自分たちで国語科授業をつくる」への転換である。これは，複式学級における課題とされてきた「間接指導の充実」についても解決の糸口を提供する。また，「自分たちで国語科授業をつくる」ことは，「単式学級」における国語科指導にも強力に応用されていくであろう。

さらに見逃せない点として，小学校教科書の改訂がある。本年度は，令和６年度小学校教科書採

択が行われ，どの教科も学習過程の可視化について力が注がれている。例えば「新編　新しい国語」（東京書籍株式会社）では，「デジタルノートの作り方」や「ノートの作り方」が教科書冒頭に掲載されている。「デジタルノートの作り方」には，考えを整理する縦軸と横軸が交差したツールや，一つの考えを枝状に広げるツールを紹介している。一方，「ノートの作り方」は，学年を問わず「学習した日付」「今日のめあてて」「自分の考え」「友達の考え」「今日のまとめ」を書くことを基本として，見開き２頁で書くように示している。なお，それぞれの利点について同書の内容を整理すると以下のようになる。

〇デジタルノート

・図表を使って，調べたことや考えたことを整理したりまとめたりすることができる。

・何度でも書きこんだり直したりすることができる。

〇国語のノート

・ノートを読み返すと今まで学習したことや考えたことが分かる。

・これからの学習に活かしていける内容を見つけられる。

つまり，新しい国語科教科書では，デジタル端末の利点である「整理」「再編集」の利便性だけでなく，国語科ノートの「メタ認知」「継続」「活用」等の利点にも注目させていることが分かる。

こうした時代の流れをふまえて本研究では，原田（2021・2022）**(1)**（**2**）の成果を基盤にして複式学級における国語科ノート指導について研究を行った。具体的には，児童が国語科ノートを自ら「つくる」ことが国語科授業を「つくる」という視点から，奄美市立崎原小学校（全３学級・鑪謙治学校長）の安田京子教諭（３・４年担任）と共同研究を進め，児童の変容を分析した。なお，本研究は令和５年４月１日から始め，脱稿時点における途中経過報告であることを付け加えておく。

## ２　複式学級指導における「主体性」の具体化

長崎・鹿児島・琉球３大学連携した先行研究（**3**）によれば，間接指導の留意点として児童の意識把握が必要であり，具体的には「児童が間接指導中の記録を小黒板やノートに残すように指導する」とある。具体的には，「間接指導に入る前に『このことについて考えていてね』と指示すれば，児童は頭で一生懸命考える。」「『このことについて考えたことをノートに書いてね』と指示すればノートに書くのである」とする。（傍線部，引用者。以下，同じ。）

また，同書の「３　国語の複式授業」の項では，低中高学年の指導案・授業記録・板書写真を収集し，教師側のわたりとずらしに着目した分析等を行っている。本論が対象とする「間接指導」・「主体性」の視点から関連個所に注目すると，「子供たちによる主体的な読み取りを進めるために，説明文においては，（中略）学習の窓を活用する」と述べられていた。また，「渡る直前の言葉掛けを工夫する」「渡っているときでも疑問に思ったことを教師にすぐに質問することは（中略）重要な行為であるが，他学年や他の児童への指導を中断させることになる」とし，子供たちには「複式学級授業であることを意識させ，自分たちで話し合い，解決できるような雰囲気づくりや声かけが重要な

指導技術である」とする。

また同書の性格を決定する冒頭部分には，「複式学級は自ら学ぶ力，一人学びの力を育成するのであり，間接指導の時は自習ではなく主体的な学習の時間である」と述べられている。この点については稿者も異論はない。ただ，「間接指導の時は自習ではなく主体的な学習の時間である」という理念を具現化するには，「指示すれば書くのである」とか，「解決できるような雰囲気づくりや声かけ」ではなく，更なる国語科指導法研究の深化が必要であろう。

例えば，鹿児島県教育委員会編「南北６００キロの教育－へき地・複式教育の手引き―」(4) では 2022 年版には無かった「主体性」に係る記述が，2023 年版では多くの記述が盛り込まれた。追加された主な記述は，以下の通りである。

表１　2023 年版「複式教育の手引き」に追加された内容

| 頁 | 追加された主な記述内容 |
|---|---|
| 1 | ・これからの授業とは「学習者主体の授業」<br>・教師に求められるのはファシリテーター的な役割<br>・複式学級においては，ますます間接指導の充実が大きなカギ |
| 3 | ・間接指導は，ＩＣＴの活用，話合い活動を取り入れる<br>・ドリルなどの課題をさせっぱなしにする時間ではない |
| 4 | ・同時間接指導とは「わたり」や「ずらし」を何度も設けず，児童生徒の思考の流れに応じた同時導入・同時終末を仕組み，２学年が同時に「課題追究」に入ることで，教師が直接指導を行わない間接指導の時間（同時間接指導）を生み出す学習過程<br>・同時間接指導は，自分たちで課題解決のために主体的な学習活動を展開させていくことができる指導<br>・教師には，柔軟に両学年をわたりながら，子供たちだけでは難しい部分についての適切な支援を行うなどのファシリテーター的な役割が求める |

つまり，2023 年版では，「教師の指導」を「わたり」や「ずらし」といった直接指導法の工夫だけに止まるのではなく，ファシリテーターとして「同時間接指導」を行うことで「子供の学習活動」を展開しようとしているのである。この根底には，中央教育審議会答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現～(答申)」（令和３年１月２６日）における「個別最適な学びと協働的な学びの一体化」があろう。子供たちには，教師の直接的な指導だけに頼るのではなく，自らの学習を調整し，他者と共に調整し合う国語科学習法を獲得させたい。これは，少人数がゆえに学級内個人差が大きくなりがちな複式学級でも，注目したい内容である。

原田（2021・2022）(1)（2）では，子供自身による国語科ノートづくりによって，「予見」-「遂行/コントロール」-「自己省察」のサイクルが回り「自己調整学習」が成立することを述べた。また「学習動機」,「学習方法・内容」,「学習時間管理」,「学習結果（目的との整合性や評価）」の領域において変容が見られることも述べた。

これらの結論を裏付ける為に，鹿児島国語教育研究会　原国会（県内外から合計１００名参加）の教員を対象に国語科ノートづくりの効果について，令和５年４月時点と９月時点の意欲の変容についてアンケート調査をし，５段階評価で積極性を回答してもらった。その結果，１学期は皆無で

あった「5」「4」の評価が約６割を占める結果となった。

以下，主な回答例を抜粋して示す。なお，アンケート回収にあたっては，県立出水特別支援学校の草野真衣教諭のご協力をいただいた。ここに記し謝辞とする。

表２　ノートづくりの効果に関するアンケート結果

| Ｑ：１学期のノート指導を通して感じた子供の変容の具体的エピソードについて教えてください。 | |
|---|---|
| ・教員年数，Ｒ５年時の担任 | 回答例（回答をそのまま引用） |
| ・教員２年目，１年生担任 | ４月は出来ない書けないと涙を流していた子が，国語が面白い！楽しい！『先生，〇〇ってどう書くんですか？』と言ってくれるようになりました。自分にもできる！やれる！と思ってもらえてると自信をもって取り組んでいると思います。 |
| ・教員５年目，１年担任 | まだひらがなも書けなかった子がノートいっぱいに文字を書けるようになった。４月は何も書きたくないって言ってた子が自分の考えを書けるようになった。 |
| ・教員７年目，５年担任 | 自分たちのノートを見比べるようになりました。（時には指摘し合う時も）私にノートを見せて「どうですか？」と言ってきます。忙しくて見てないと，次の日に「なんで見てないの」と駄々をこねます。国語のノートはもちろん毎時間集めていますが，算数は私が教えてないのに，授業が終わったら私の机の上に算数のノートが置かれています。（見ろということか…となりますが）質に関してはまだまだのびしろ有りだと思いますが，ノートが子供の自慢であり，誇りになりつつあるのかなと実感しています。ノートは私にとって子供のやりとりであり，繋がりです。ノート指導が学級経営の一部になっています。 |
| ・教員６年目，５年担任 | 既習のノートを見返して，学習に生かしていた。学習のプロセスを意識し，自ら学習を進める学習者としての育ちがあった。 |
| ・教員２０年以上，特別支援学級担任 | 書けたり読めたりする平仮名が増えて，嬉しそうに踊ります。 |

## ３　研究の方法と内容

### （１）研究の方法

大村（2004）（5）は，単元「私たちの生まれた一年間」の実践例紹介し，どの子も夢中になって取り組む国語科授業の大切さについて説く。

・実践の概要

生誕年の新聞１年分を教材として，生まれた月ごとのグループに分かれて，その月がどのような月だったか発表し合う。最終的には情報を総合化して，生誕年についてまとめる。

・大村自身による実践の説明（本書Ｐ34 より引用）

月別に分かれているグループは，皆が夢中になってやっています。同格でやっているのです。ひとりひとりをだいじにするということは，具体的に言えば，自分自身のもっている力をだいじにして，それを人と比べて悲しがったりしないで，そういう観点の世界にいないで，それぞれが自分の力のいっぱいを，われ知らず尽くしているような時，そのひとりひとりが救われているのではないかと思うのです。

大村が大切にしていた，「優劣の彼方に」を具現化する実践である。特に，「皆が夢中」であることは「ひとりひとりをだいじにする」ことであるとする点は，前述してきた主体的な学習の姿として認識することができよう。

ところで「夢中」という状態を，学習への没頭（エンケージメント）と捉え直すと，さらに子供の姿を思い浮かべやすい。文科省の平成２８年１月１４日付「教育課程部会資料」**(6)** では，エンゲージメントの状態を，表３のように整理した。本研究では，文科省が整理した「意欲的な姿」を，主体的な国語科授業像として読み替え，対象児童を観察する視点とした。また，「意欲的な姿」を実現する，自己調整・共調整の往還構造については，原田（2023）では図１のように図式化した。

表３　「意欲的な姿・意欲的でない姿」

| | エンゲージメント（engagement）<br>=約束，婚約，雇用，従事，没頭<br>・意欲的な姿 | 非エンゲージメント<br><br>・意欲的でない姿 |
|---|---|---|
| 行動的側面 | 行動する，努力する，尽力する<br>一生懸命取り組む，試行する<br>持続的・熱心に取り組む，<br>専念する | 受動的で先延ばしにしようとする<br>あきらめる，落ち着きがない<br>気乗りがしない，注意散漫<br>課題に焦点が向いておらず不注意<br>燃え尽き状態，準備不足，不参加 |
| 感情的側面 | 情熱的・興味を示している，<br>楽しんでいる，満ち足りている<br>誇りを感じる，活き活きしている，<br>興奮している | 退屈している，興味がない<br>不満げである／怒っている<br>悲しんでいる，恥じている<br>気にしている／不安を感じている<br>自己非難している |
| 認知的側面 | 目的を自覚し努力する，<br>アプローチする，方略を吟味する，<br>熟達を目指す，最後までやり抜く<br>丁寧で几帳面である，<br>積極的に参加する，集中する，注意を向ける，<br>チャレンジを求める細部まで | 無目的・無力な状態である<br>あきらめている，気の進まない様子である，反抗的である，頭が働いていない，回避的である，無関心である，絶望している，<br>精神的圧迫を感じている |

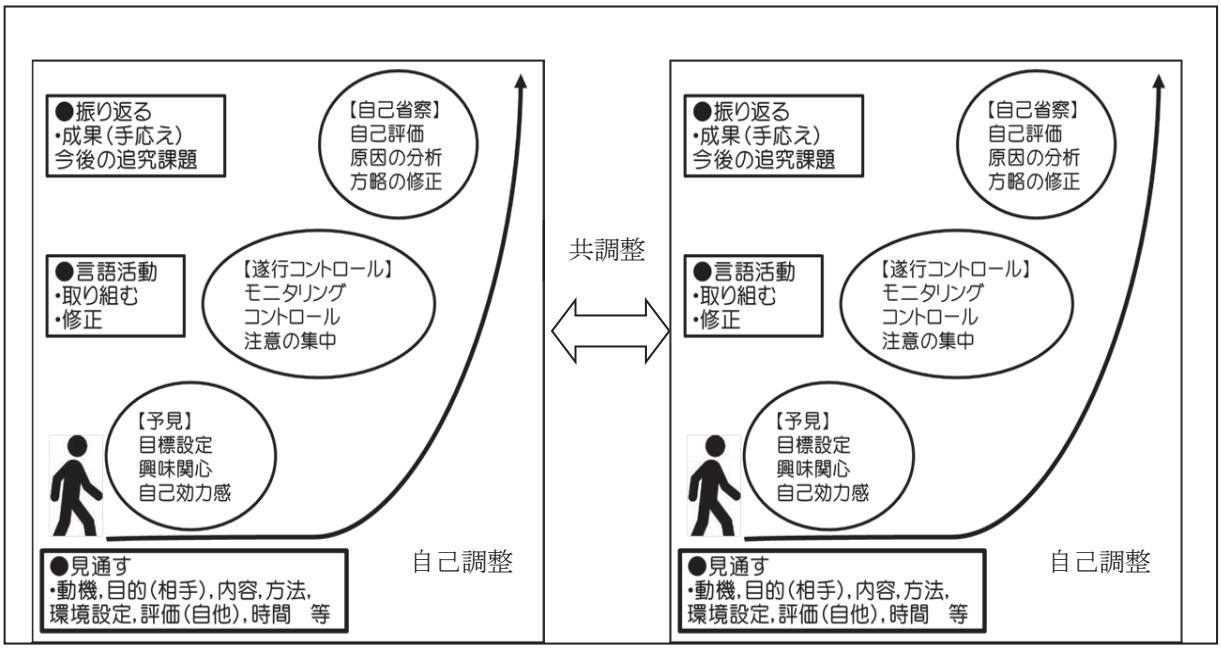


図１　「自己調整・共調整の往還構造」

さらに，原田他（2022）(1) では，ノートづくりのポイントとして表４を示した。

表４　主体的な学習を促すノートづくりのポイント（読むこと）

<table>
<tr><th>視点</th><th>内容</th><th colspan="2">チェックポイント</th></tr>
<tr><td rowspan="2">共通</td><td>学業指導</td><td colspan="2">・日付，単元名・教材名，筆者・作者名，めあて，まとめ，振り返りの記入をさせているか。<br>・ノートで使う色は３色まで。<br>・必要なプリントは，貼らせているか。</td></tr>
<tr><td>学習指導</td><td colspan="2">・ノートの表紙裏等に必要な思考ツール・語彙表等は貼らせているか。</td></tr>
<tr><td rowspan="6">個別</td><td rowspan="5">授業で</td><td colspan="2">「読むこと」の学習過程に沿って</td></tr>
<tr><td>把握</td><td rowspan="2">・初発の感想，学習計画表が書かれているか。</td></tr>
<tr><td>精査<br>解釈</td></tr>
<tr><td>考え</td><td>・思考ツールを使用して，自分の考えをまとめているか。<br>・自分の考えを〇字以内（マス目）で書かせているか。</td></tr>
<tr><td>共有</td><td>・他者と意見交換をした跡が残っているか。</td></tr>
<tr><td>家庭学習で</td><td colspan="2">・漢字，語句調べ<br>・単元の扉づくり，好きな文章の視写</td></tr>
</table>

本研究では，以上の研究成果等を基盤として，２０２３年度４月から，鹿児島県奄美市立崎原小学校（鑪謙治学校長）において，３・４年複式学級担任　安田京子教諭の協力を得ながら，実践を展開していただいている。そして，Ｚｏｏｍによりノートの分析を共同で行うことにより，より客観的な分析を進めてきた。今回は，２０２３年１学期末の時点で得られたデータを基に，実践の概要を報告したい。

（２）研究の内容

①　ノートづくりのポイント

ア　思考ツール（読みの視点，三角ロジック）の活用

子供が一人で文章を読み進めるには，自ら活用できる思考ツールが大切である　４月当初には，三角ロジックやペンタゴンロジックなどの思考ツールをいつでも確認できるように，ノート冒頭に貼り付けさせた。また安田教諭は，鹿児島大学附属小学校の研究を参考にし，「読みの視点」（教室では「技」と呼称）して整理した。

表５　「読みの視点」（３年生で使いたい「技」）

| | |
|---|---|
| 文学的文章 | 挿絵，リズム，オノマトペ，色彩語，諸感覚，設定，変化，作者，人物の行動・会話・心情・性格　等 |
| 両方に共通 | リフレイン，対比，題名，文章構成　等 |
| 説明的文章 | 写真・イラスト・図表，接続詞，文末，段落，順序，中心となる語句・文章，主張，事例，根拠等 |

イ　共有の工夫

音声言語の共有だと，他者と意見交換をした跡が残らない。書き綴ったノートに他者からコメントをもらうことで，学習結果が強化されることにつながり主体性を育む。特に，複式

学級では，同学年だけでなく異学年や管理職，保護者からのコメントをもらうことが容易である。そこで，誰とでもコメントを書き合うことができるノートの利便性に着目し，学級内，学校長などの学級外の方からもコメントをもらい，自己の良さを認識できる共有活動を展開することとした。

ウ　時間管理の工夫

教師が常に時間を管理する授業は，子供たちの主体性を育む観点から離れていく。子供自ら，活動時間・単元全体の時間を把握することで，学習速度の加減・学習方法や範囲の選択を行うことができる。ノートに書き綴られた学びの記録を見直したり，学習の進行をチェックしたりすることで時間管理の感覚が磨かれていく。

エ　ＡＡＲサイクルの循環

OECD Future of Education and Skills 2030 プロジェクトの成果として，OECD ラーニング・コンパス（学びの羅針盤）2030 が提出された。これは，生徒エージェンシーを中心概念とし，知識，スキル，態度と価値，より良い未来の創造に向けた変革を起こすコンピテンシーを含み，そのプロセスとは，見通し（Anticipation），行動（Action），振り返り（Reflection）の AAR サイクルである。ノートに学びのプロセスを綴り可視化していくことは，複式学級の子供たちが AAR サイクルを実感し循環させていく際の支援ツールとなっていく。

（３）研究の実際

①　思考ツール（読みの視点，三角ロジック）の活用について

小学校学習指導要領国語編の「知識・技能」「⑵情報の扱い方に関する事項」では，中学年の指導事項において，自分の考えとそれを支える理由や事例を読み分けたり書き分けたりすることが求められている。したがって，多くの小学校では「三角ロジック」を活用している。安田学級でも，第３学年「こまを楽しむ」の学習では，自分が遊んでみたいこまについて三角ロジックを用いて考えを整理し，まとめさせた（図２）。また，第４学年「一つの花」の学習では，「一つの花」という題名の意味についてまとめさせた（図３）。もちろん，ワークシート等を使用してまとめることもできるが，読みの視点に基づいた個人の読みの結果ついてノートを見返すことで，より的確な三角ロジックを完成させた。これは，間接指導時においても同様であり，指導形態に左右されずに子供自ら思考ツールを使いこなしていく様子が見えた。

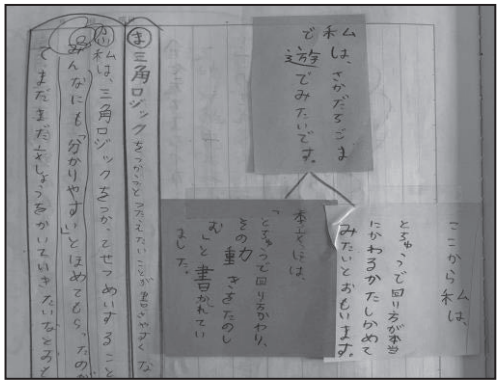

図２　第３学年「こまを楽しむ」

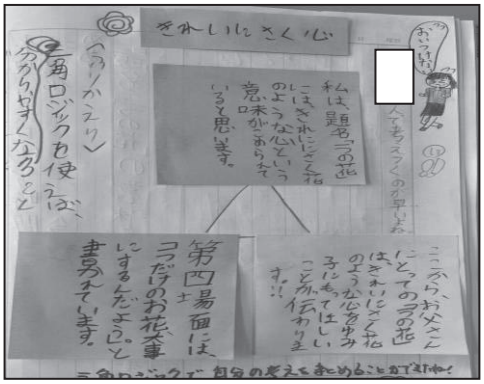

図３　第４学年　「一つの花」

② 共有の工夫について

学習指導要領において，育成すべき「思考力・判断力・表現力」の全ての領域に「考えの形成」と「共有」が位置付けられている。しかし，令和４年度全国学力調査結果考察では「本調査で初めて取り上げた，文章の構成や展開について感想や意見を伝え合うことを通して自分の文章のよさを見付けることに課題が見られる」「文章に対する感想や意見を伝え合い，自分の文章のよいところを見付けることに課題がある」という報告がされた。それに対する指導のポイントとして，ア振り返りの場面などで自分たちの話合いの様子を確かめる活動を設定すること　イ異なる意見を自分の考えに生かして考えをまとめることができるよう「～という意見もあったが」「～という考えもあるけれど」などの表現を話し合いの中で用いることができるように指導することが指摘された。これらの指摘事項は，複式学級の間接指導時に解決することは容易ではない。しかし，ノート指導はこれら「共有過程における課題」を解決してくれる。

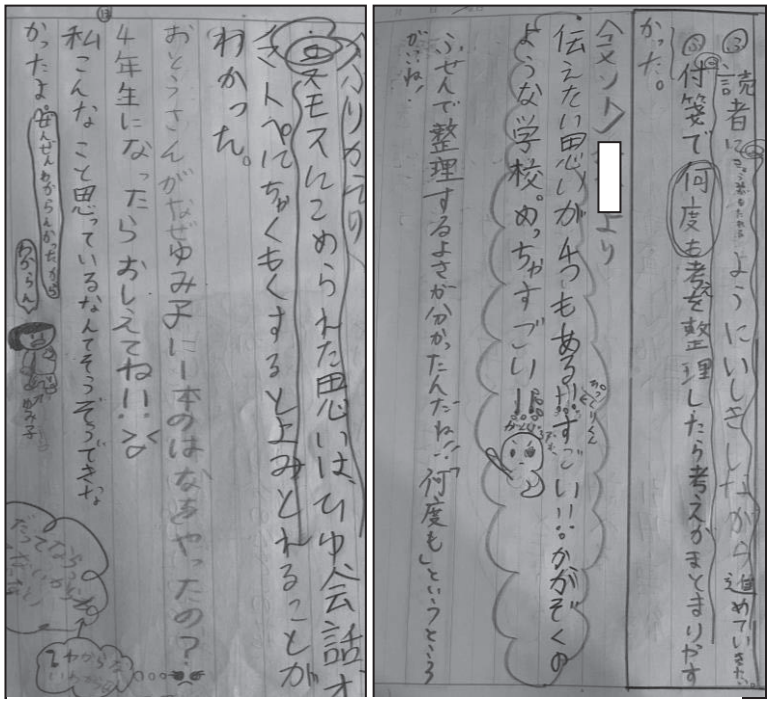

図４　共有時のコメントを書き合ったノート例

安田学級では自分の考えを形成した後に，「ノート」を用いて学級内外の他者と共有した。その際，自分がどのように考えをつくっていったのか，ノートに書かれたプロセスを指さしながら対話を展開した。そして，対話後には感想や意見，質問などを赤鉛筆でコメントし合う時間を設け，互いのノートを共有することで，学びのプロセスを共有する様子が見られた。また，この取組は，他者の考えと自分の考えの比較や，友達からの称讃的なコメントにより，学習に対する達成感，ひいては自己効力感の高まりにつながった。また，学校長の鑪先生からコメントをもらうことで，学習結果が強化されていった。

③ 時間管理の工夫について

ノートに〇分の〇時間目と書かせることで，学習計画を立てる際に，子供たちは同領域学習を想起して「この前と同じように，５時間目に下書きをして６時間目に推敲だね。」など，単元の流れを意識した声が聞こえるようになってきた。また，１単位時間の中でも「メモの構成作りは，今から 15 分間でしよう。」と自らタイマーを用いて学習に取り組む姿が見られた。

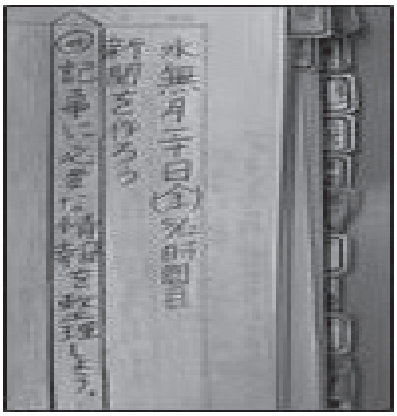

図５　時間を書いたノート例

④　ＡＡＲサイクルの循環について

子供たちが何をどのように学んだのか自覚するためには，学習過程を可視化することが大切である。今回の実践では，１単位時間２頁の見開きで学習を完了させるようにした。子供たちは，タブレット端末から得られた情報を丸写しするのではなく，ノート２頁見開きという「制限」の中で情報を要約した。そして，自分の考えを書き加え，問いの解決をすることができた。また，ダイヤモンド・サイクルの観点（わかった・できた・納得した・もっと知りたい）による毎時間の振り返りを積み重ねることで自己の変容に気付いたり，学びへの意欲が新たに高まったりする姿が見られるようになった。この学びのプロセスは，国語科ノートに蓄積され次の時間へと活かされていった。正にＡＡＲサイクルが国語科ノートによって循環し，主体的な学びが展開されていった。

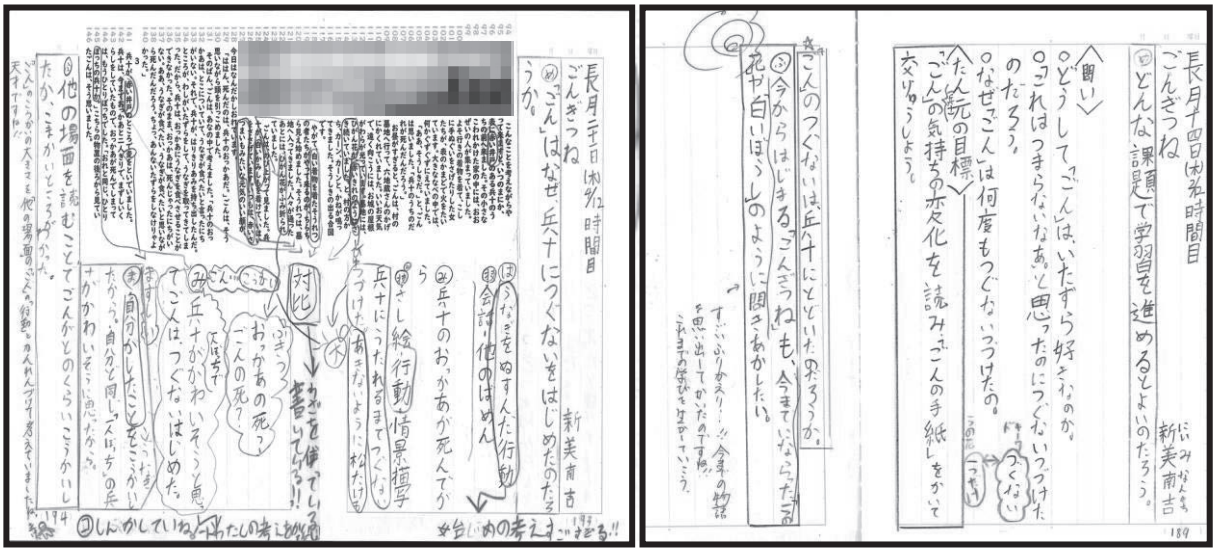

図６　学習プロセスを綴ったノート例

（4）本実践の成果

安田教諭は実践の成果として次の点を挙げた。

・子供たちが間接指導時に，国語科ノートをツールとすることで，考えを形成したり共有したりして，主体的に学ぶことができるようになってきた。

・間接指導時の学びのプロセスがノートに記されているため，教師の評価がしやすくなった。

・１学期だけで国語科ノートが１人３冊を書き上げ，子供たちの書く力が高まった。また他教科のノートも２冊を超えている。

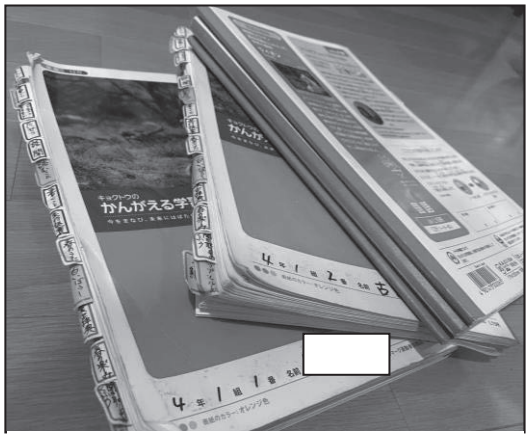

図７　１人３冊書いた１学期のノート

・子供たちが，ノートを使うことで，自他と対話をしながら学ぶ姿が見られるようになった。

・ノートにこれまでの学びがすべて蓄積されているため，いつでもすぐに自らの学びを見つめ直すことができ，今までの学びを生かし，調整しながら学びを進めていく姿が見られた。

・本研究を通して，「ノートづくり」が個別最適で協働的な学びを実現するための最高のツールであ

ることを実感した。ノートに記録された自らの学びを振り返り，生かしながら次の学びを進めていく姿は，今求められている学びの姿そのもの。

・教師自身が，複式指導を子供たちの主体性を育むよい機会と捉えられるようになった。

複式学級の国語科授業の半分は，間接指導である。安田教諭の言葉には，子供たちの学習量や質の変容だけでなく，自身の「複式学級に対する学習指導観」とも言うべき内容が含まれている。安田教諭の「複式指導を子供たちの主体性を育むよい機会」という声は，子供のノートづくりが主体的な国語科授業づくりを拓くことだけではなく，授業は教師との共創であるという，重要な点を再確認させる。

## ４　今後の方向性

令和５年度全国学力状況調査の質問紙には，国語の勉強に関する子供の意欲関心を訊く質問がある。例えば，「国語の勉強は大切だと思いますか」という質問に対しては 69.2%の子供か「そうだと思う」を選択している。算数に対する同様の質問に対する答えが 75.4%　英語 69.8%であることを考慮すると，子供たちは国語科学習の必要性を他教科と同等のレベルで意識していると言えよう。

一方，「算数の勉強は好きですか」については 34.9%，「英語の勉強は好きですか」については 38.6%の子供が「そうだと思う」と答えたのに対して，国語はわずか 24.0%に止まる。同調査では，複式学級だけを取りあげた調査を実施しているのではないが，複式学級では同級生や教師との対話的な学びが制限されることを考慮すると，「国語が好き」という子供は，さらに減少することが予想される。実際，主体的に国語科学習に取り組めず，準備されたワークシートの穴埋め式学習に終始する授業が多いという。

本研究では「～書きなさい，写しなさい」という「指示すれば書ける」という指導法から脱却し，ノートづくりを通して主体的・対話的で深い学びの実現を目的としている。本研究は，まだ研究半ばであるが，以下の子供の声（南海日日新聞・2023.5.22 付）を一つの道標として，今後も研究を継続していく。

「にこにこ仲良く自分から」

崎原小４年

（前略）私はこの４月から崎原小中学校に転入してきました。３・４年学級は，全員で３人です。人数は少ないけれど，いつもたくさんのにこにこ顔があふれています。また，授業中は，先生が３年生と学習を進めている時間は，自分たちで勉強を進めています。最

にこにこ仲良く自分から

崎原小４年・[redacted]

「にこにこ仲良く自分から」。これは、私の学級のクラス目標です。４月にみんなでいっしょうけんめい考えて決めました。私はこの４月から崎原小中学校に転入してきました。３・４年学級は、全員で３人です。人数は少ないけれど、いつもたくさんのにこにこ笑顔があふれています。

また、授業中は、先生が３年生と学習を進めている時間は、自分たちで勉強を進めています。最初は、先生なしでどうやって学習を進めたらいいのかなと不安でした。でも、同じ学年の友達と考えたり、ノートに考えをまとめたりして自分で進めていけばよいことが分かりました。自分から勉強を進めていくのが今はとても楽しいです。

崎原小中学校は、たくさんの自然と楽しい行事がいっぱいです。中学生のお兄さん、お姉さんもとても優しいです。これからも、自分から学校生活を楽しんでいきたいです。

初は，先生なしでどうやって学習を進めたらいいのかなと不安でした。でも，同じ学年の友達と考えたり，ノートに考えをまとめたりして自分で進めていけばよいことが分かりました。自分から勉強を進めていくのが今はとても楽しいです。（後略）

## ５　参考文献


(1)　原田義則・原之園翔吾「主体的な学習態度を育む小学校国語科ノートづくりの研究」，鹿児島大学教育学部実践研究紀要第 31 巻，2022.2

(2)　原田義則・原之園翔吾・辻美咲・山口奏良「主体的な学習態度を育む小学校国語科ノートづくりの研究（2)」，鹿児島大学教育学部実践研究紀要第 32 巻，2023.2

(3)　長崎・鹿児島・琉球３大学連携研究「複式学級指導法」編集委員会編『複式学級指導法-単式学級内の学力差に対応した現場の工夫にも役立つ指導法-』，ｐｐ7-8，ｐｐ13-49，東京教学社，2009.3

(4)　鹿児島県教育委員会編「南北 600 キロの教育ーへき地・複式教育の手引き―」，2023.3

(5)　大村はま『大村はま講演集　下　教えながら教えられながら』，2004，風濤社

(6)　文科省「教育課程部会資料」，2016・１
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/060/siryo/__icsFiles/afieldfile/2016/02/04/1366512_13.pdf